

本研修ではテヘラン市内、地方都市にて視察が実施され、イランの文化や芸術に触れるフィールドワークの機会に恵まれた。そのため中東地域の外交や経済のみならず、かねがね関心を寄せていたイランの植物文様装飾をめぐる議論についても、多くの視座が得られた。

さて、イランにはラーレ・アッパースィー (Lāle 'Abbāsī, Shāh 'Abbāsī とも) と呼ばれる文様がある。イスラーム地域に広くみられる花の文様ハターイー (Khatā'i) の最も美しく、完成された姿とされ、その美しさは往々にしてチューリップに喩えられる。ハターイー研究はつとに地域・語り手ごとの〈ゆらぎ〉の中にあるが、それでも叙上の解釈はイランに特有のものだ。

こうした〈美しさのメタファー〉としてのチューリップ、その延長上にあるラーレ・アッパースィーについて、私は——西欧的視点では現代イランのチューリップ表象が殉教、すなわち革命政権と親和性の高いイデオロギーという文脈で常々語られてきただけに——どう咀嚼してよいか分からずにいた。実に今回のイラン訪問にむけた思いは此処に端を発しており、こうした問いを通じ己の〈まなざし〉を改めて批判的に分析すべく、本研修に参加した。

なお本稿は、2022 年度イラン短期研修に参加した知見に基づいているが、筆者の個人的な見解をもとにまとめたものである。文責は全て筆者に帰し、所属する組織や本研修主催団体等の意見・見解を代表するものではないことをお断りしておく。

## 1. テヘランとチューリップ

テヘラン滞在中、私たちの世話をしてくれた一人に SIR の卒業生がいた。彼は——思い返すと強烈な思想信条をもつ者も少なくなかった SIR 関係者らの中で——中庸的な言論を展開することの多い人物だったように思う。一方で議論の場を離れると、詩や芸術を知悉する一面や信心深いムスリムの顔を覗かせ、これまでイランの知識人層にラディカルなイメージが強くあった私は彼の姿に目を開かれた。

イデオロギーとしてのチューリップ像をめぐることも同様に、己の〈まなざし〉を省察する契機となった。テヘランではイスラム革命・聖なる防衛戦博物館 (Museum of the Islamic Revolution and the Holy Defense) に赴き、また国の管轄下にある施設へも度々訪問した。しかしいずれの場所でも露骨な〈イデオロギー的チューリップ〉を目にすることはなく、ここに文献から抱いていた〈現代イランのチューリップ像〉との乖離を感じた。革命から 40 年以上過ぎた今、事象をことごとく革命の文脈に帰結させることは議論の芽を摘むことに他ならないと心に抱きながら、テヘランを後にした。

## 2. エスファハーンとラーレ・アッパースィー

私たちの乗ったバスがエスファハーンへとさしかかった頃、車窓の外にラーレ・アッパースィー

スィーの装飾を施した壁がみえた。驚いたことに、市街地へ近づくにつれ街中のラーレ・アッパースィーもみるみる増えていく。こうした車窓からの眺めは後々明らかになるこの文様の地域的な性格をよく表しており、エスファハーンではこうしたささやかな出来事からラーレ・アッパースィーへの新知見が得られ、興味が尽きなかった。一方で車窓からはエスファハーンが、かつて私が訪れた頃と比べ、その賑わいを失っていることも感じられた。物価の上昇も目の当たりにし、イラン経済に降りかかる様々な困難の片鱗が見てとれた。

またイラン滞在中この文様をとりたてて説明したのは、意外にもテヘランの美術館職員ではなく、エスファハーンの商人・職人たちであったことは注目に値する。絨毯屋で、工芸品の店で、彼らは〈エスファハーン・デザイン〉がいかに美しく価値あるものなのかを語り陶酔していたが、その品々の殆どにラーレ・アッパースィーが施されていたのには圧倒された。私の眼に映ったラーレ・アッパースィーは、懸命に生きる人々の誇りとともにエスファハーンに息づいていた。

### 3. カーシャーンと薔薇

旅の終いにはカーシャーンを訪れた。カーシャーンもエスファハーンと同じくサファヴィー朝に所縁ある土地だが、街並みや歴史的建造物に用いられる装飾は、エスファハーンのものとは趣を異にしていた。エスファハーンとラーレ・アッパースィーとの深い結びつきをここで再認識できたこと、イランにおける芸術の多様性を知れたことは大きな収穫だった。またカーシャーン市長との面会では、日本のどこかの都市と姉妹都市の提携を結びたいとの旨が伝えられ、市長より直々に贈り物が手渡された。最後にこの〈贈り物〉をめぐる勘えたことを記し、本稿の総括としたい。

市長は私たちに〈贈り物〉として、一輪の薔薇、美しい木箱に入った薔薇の精油、そしてカーシャーンについて書かれた本を渡した。ただし私にはこの贈り物がただの〈おもてなし〉ではない——つまりこれはある種の〈心付け〉であり、市長の真剣さのあらわれである——ように感じられた。そして同時にカーシャーン市長の姿勢は、テヘランで面会した人々とは対照的なものとして目に映った。

これは、決してテヘランでのもてなしが丁重でなかったという意味ではない（むしろ丁重すぎて恐縮するほどであった）。そうではなく、彼らのもてなしに〈タテマエ〉的なものしか感じられなかった、つまり我々との交流を通じ何かを得たいとする〈ホンネ〉がないように感じたのだ。要は、日本はもはやイランからそれほど相手にされていないように感じた、ということである。

中東地域における日本の存在感の薄れは今に始まったことではない。しかしここ数年それはより顕著になり、芸術を学ぶ一学生の私でさえもが危機感を覚えるまでになっている。カーシャーンの地で本研修に改めて向き直った時、日本がイランあるいは中東に長らく向けてきた〈無関心〉をまざまざと見せつけられたような気がした。

首都テヘランでの空気感が、地方都市カーシャーンまで波及するのはいつだろうか。私にはそれが、そう遠くない未来であるように思えてならない。